

キャスリーン・M・ブリー著／鈴木彩加訳（人文書院 2022年）
『レイシズム運動を理解する 理論、方法、調査』

梁英聖*

著者ブリーは米極右を①内部調査によって、しかも②女性への調査によって研究してきたが、本書はそれら過去の研究を振り返り③方法論にまつわる諸課題を多角的に論じている。そのため序章の後は訳者解題に従い、著者の主研究たる一九二〇年代の第二派クラン内部女性への調査と、九〇年代以後の極右女性への調査をおさえるべく第九、一〇章を読むとよい。ほぼ個別論文を元にした全一五章の本書ではこれら研究が随所で参照されるので重要な補助線となろう。

本書は短い要約には適さない。本稿では①極右内部研究と②ジェンダーを分析する際の方法論に絞って、日本の読者にとって重要だと思われる内容を紹介するに留める。

例えば極右内部調査が「人種差別的プロパガンダに対して軽率にもプラットフォームを提供してしまうかもしれないという学問の倫理的ジレンマ」(51頁)がある。だからこそ著者は本書で極右、組織されたレイシズムへの調査研究における、独特の倫理と方法論の開発の必要を提案する。第一章タイトル「敵を研究する」に明示されている通り、本書全体を通じて著者は極右を公然と「敵」扱いし調査者／対象者間の敵対性を片時も忘れない。第三章「白熱する調査」で分析される通り、極右の場合、調査時の対象者との関係は「ラポールと共感」であってはならず、むしろ「恐怖の力学」を分析すべきだ。すなわち極右は組織された暴力を動員し自らに有利になる研究をするよう研究者に恐怖を与える。だが同時に「恐怖の力学は関係的」であり、極右もまた「〔自分が〕人種差別活動家だということにまだ気づいていない警察や〔反レイシズム団体等の〕敵、家族に情報を開示される」(58頁)等を恐怖してい

る。結論として著者は言う。「共感とラポールという調査のスタンスは、一部の調査協力者を対象とした質的調査の方法論としては適切かもしれない。しかし、同じ方法を別の調査協力者に対して用いた場合、悪用されたり、恐ろしい政治的思惑に学問が加担することになったり、決定的な誤解を招いたりするリスクがある。」(67頁)。

じつは極右内部調査にまつわる「恐怖の力学」こそ、著者が一度は極右研究の継続を断念した理由にかかわる。第三章から長い重要なので引用する。ある調査では以前の調査で極右側が危害を被らなかつたために極右が著者のことを「信頼できる研究者であるという確信をもっていた」という。そして著者もまた「暴行の話や「人種戦争」の準備についての自慢話に対して次第に〔以前のような敵対的な〕感覚が無くなっていた。私と調査協力者たちの関係性は、インタビューにおいて自分に有利な条件を成立させるためのビジネス上の取引のような形へと次第に変化していた。恐怖はフィールドワークを阻害する要因にならないわけではなかったが、最初の頃に比べて目立たなくなり、影響力も弱くなっていた。さらに、これらの後に実施したインタビューは、初期に実施したインタビューよりも知的にも生産性が低かった。私の洞察力を刺激していた恐怖にもとづいた緊張感は消え始めていた。私は組織化された人種差別の恐怖に対して無感覚になった。こうした状況は、個人的に失望しただけでなく、フィールドワークを終わらせて研究から感情的に離れる必要があるのだということを示してもいた」(66-67頁)。著者は調査で極右との間で作動していた／いるはずの「恐怖の力学」を分析し得なくなったこと

* 東京外国語大学 世界言語社会教育センター

に直面し研究を一旦は止めた。日本では米国ほど法律でも社会規範でも反レイシズムが強くないため、在特会や日本第一党ら極右も逮捕や訴訟の恐怖をさほど感じずに済む一方で、研究者もおそらく本書で縷々強調されている極右内部調査にまつわる倫理的な諸問題をさほど意識せずに済んでしまうという客観的状況があることは否定できまい。それだけに本書の指摘は私たち日本社会の研究者への貴重な警告となっているはずだ。

第二はジェンダーと方法論についてである。著者は第七章「合衆国の極右とジェンダー」で極右研究の理論におけるありがちな「テンプレート」を批判する。七〇年代半ばに現れた米国の極右女性研究が抗おうとしたかつての「右派とは男性であるというテンプレート」(134頁)を批判する文脈で、著者は「組織化された人種差別はジェンダー化されている」と指摘する(135頁)。すなわち二〇年代の「女性クランのなかでも突出したリーダーたちの多くは、女性参政権運動に携わった後にクランへ入会していた。〔中略〕この経験によって、彼女たちは女性のために独自に調整された戦術、少なくとも男性クランによる伝統的な夜回りの暴力と同程度に効果的で快適な戦術を構築した」(134-5頁)。つまり「ささやく女性たちの毒殺部隊」が結成され、「販売されていた肉が腐っていたとしてユダヤ教徒の商人の生活を壊し、性的暴行の噂を流してアフリカ系アメリカ人男性を自宅やコミュニティから追い出す」(135頁)。ここでは「夜回りの暴力」といった襲撃タイプのレイシ

ズム暴力が男性クランによって、「毒殺部隊」による情報宣伝工作が女性クランによって担われていたことを明らかにすることで、レイシズムの組織化現象がジェンダー化されていたことが見事に示されているよう。(ただし重要な前史であろう一九世紀女性参政権運動のレイシズムについては説明が見当たらないのでベル・フックス著、柳沢圭子訳、大類久恵監訳『アメリカ黒人女性とフェミニズム』(明石書店、二〇一〇年)等参照)。

だが同時に著者は二一世紀以降現れた「ジェンダーは分析カテゴリーであるというテンプレート」(145頁)をも批判する。例えば二〇年代のクランでの有権者としての女性の参加でも、今日の白人至上主義運動による女性のリクルートでも「彼女たちが女性であるということはあまり重要ではない」。なぜなら二〇年代は「白人女性は選挙権を得たばかりで」クランにとって選挙での票や資金面で魅力があった一方、今日では女性は前科がなく警察の情報提供者になりにくい等の理由からリクルートされており、いずれも「女性たちは間接的にジェンダー化された理由から、組織化された人種差別へと引きずり込まれている」(以上147-148頁)。「組織化された人種差別ではジェンダーが重要であると推測的に仮定してしまうことによって、ジェンダーが重要となる興味深い方法を理解することが難しくなってしまう可能性がある」(148頁)とは、むしろレイシズムが常にジェンダー化されていればこそ余計に傾聴すべきなのであろう。